幼児期の運動遊びに関する一考察

——— 運動意欲の低い幼児を対象とした運動遊びの実践をとおして ———

松坂 仁美
(美作大学短期大学部)

I はじめに

幼稚園教育要領の平成元年の改訂にともない、幼児教育の現場では、子ども達が自ら選んだ遊びや活動に主体的に取り組むことが目標とされた。その結果、運動遊びの嫌いな子ども達は運動遊びをあまりしないという現状が見受けられる。果たして、自ら運動遊びを選ばない幼児は、運動遊びが本当に嫌いなのだろうか？また、本当に運動技能が他の幼児よりも劣っているのでしょうか。

運動経験が子どもの自己概念の形成に影響することや、運動有能感と幼児の行動の間には優位な相関があることを示唆する研究は多い。岩崎らは運動有能感が低いことが運動能力や技能だけでなく、行動全般の消極性や身辺自立の遅れなどにも影響することを指摘している。

以上のように、運動遊びは単に体力の問題ではなく、幼児の人格形成の上で重要であることは明らかであろう。そこで、本研究では、運動遊びへ意欲的でない幼児を対象として、彼らが運動スキルを獲得し、運動有能感が持てるような場を設定する。そして運動遊びの実践を通して、その後の幼稚園生活での行動の変化を検討し、幼児期の運動遊びの重要性についての示唆を得たいと考えた。

II 研究方法

本研究では運動遊びに意欲的でなく運動スキルも低い幼児を対象に、運動遊び教室を実施した。

- 1) 対象：M園(年長児)36名の中から行動観察及び運動スキル調査により、7名の幼児を対象とした。
- 2) 実施期間 2001年7月～9月
- 3) 実施内容

事前観察と運動スキル調査：運動遊びへの意欲を見るため10日間の行動観察—朝の自由遊びの時間(午前8:30～9:30)の行動をVTR及び書取りにより記録—と運動スキルのチェックを行った。調査内容は前橋氏の研究を参考にチェックリストを作成し、自由遊びの観察時に実際に幼児に行わせ、調査した。その結果より、運動遊びに消極的であり、苦手意識の強い傾向のある幼児を12名を抽出した。彼らの保護者に運動遊び教室への参加を依頼し、参加が得

られた7名を対象とした。

運動遊び教室：運動遊び教室は夏休み中、週2回合計8回実施。1回は午前10:00～11:30の1時間30分である。運動遊びの内容は表1の通りである。指導者は3名、幼児が主体的に遊びに関われるように配慮した。運動遊びの様子及びスキル獲得状況はVTRに記録し、分析した。

事後観察：対象児に限り、2学期の初めに行動観察を行った。

担任教諭の所見：担任教諭より対象児の園での行動について事前・事後の所見をもらった。

III 結果及び考察

ここでは対象児7名中、運動遊び教室への参加が6回以上であった4名を対象として、結果を述べる。実践後の運動スキルの獲得状況は表2に示した。

事例1 A児(女児)

<事前の観察と担任所見より>

特定の幼児(B児)との関わりが多く、行動面では消極的。外遊びへ誘うと疲れるから嫌だという。あまり意志表示せず、B児の意見に従う。運動遊びはほとんど自分からすることはない。

<運動遊び教室での様子>

1回目は母親を基点にし、B児とともに行動していた。疲れたと母親の所へお茶を飲みに行く。長縄跳びが4回跳べた頃から遊びへ意欲的となり、母親の所へ行く回数が減った。2回目は長縄跳びが10

表1 運動遊びの内容

長縄跳び フープ マット 雲梯 ボール 竹馬	馬跳び 跳び箱 鉄棒 登り棒 鬼ごっこ
幼児の主体性にあわせて、遊びを変化させた。	

表2 事前チェックと共通の実践後のスキル獲得状況
(×できない、○できるを示す)

		A児		B児		C児		D児	
		事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
雲梯	ぶら下がりがわり	×	×	×	×	○	○	○	○
	4つ足歩き	×	○	×	○	×	○	○	○
鉄棒	跳び上がる	×	○	○	○	○	○	×	○
	足かけぶら下がり	○	○	○	○	○	○	○	○
	ふとんほし	×	○	×	○	×	○	○	○
	足抜き回り	○	○	×	○	×	○	○	○
	両膝掛け懸垂	×	○	×	○	×	○	○	○
	鉄棒上に座る	×	○	×	○	○	○	○	○
	前回り	×	○	○	○	×	○	×	○
	逆上がり	×	×	×	×	×	○	×	×
縄跳び	長縄跳び	×	○	×	○	×	○	×	○
	大波小波	×	○	×	○	×	○	×	○
	短縄跳び	×	○	×	○	×	○	×	○
跳び箱	開脚跳び	×	○	×	○	×	○	×	○

回以上跳べ、他の幼児がやめても遊び続けた。跳び箱や雲梯での遊びにも集中して取り組み、休憩しようという「いやだ」という。回をおうごとに積極的にいろいろな遊びに取り組み、できることがどんどん増えた。B児と別に遊ぶ姿も見られた。

＜事後の観察と担任の所見より＞

B児以外の友達と遊ぶことが増えた。また、自分からいろいろな遊びに挑戦する意欲が見られ、運動遊びにも積極的になった。担任に甘えられるようになり、意思表示が以前よりできるようになった。

事例2 B児（女児）

＜事前の観察と担任所見より＞

A児と一緒に行動し、主導権を取るが、クラス全体には意見や思いを言えない。ままごとやお絵かきを好み、運動遊びはほとんどしない。「やってもできない」という意識を持っており、自信のないことはやらない。運動スキルチェックの際も「できん」と言って挑戦しない。

＜運動遊び教室での様子＞

1回目は、A児と共に行動していた。長縄跳びで5回跳べた後、意欲的になり、10回跳べるようになった。「やりたい」という発言が増えたが、あきらめも早く「疲れた」という。2回目以降は新しい遊びに意欲的であり、できることがどんどん増えていくが、できそうにないと思うとすぐあきらめる傾向があった。しかし、指導者への補助をせがんだり、休憩を嫌がり、くり返し遊び続けることもあった。

＜事後の観察と担任の所見より＞

2学期の開始直後はとても積極的に運動遊びに取り組んだ。1ヶ月ほどたつと興味は薄れたが、遊びの幅は広がり、「できる」ことが自信につながり、いろいろな人と関わられるようになった。また、初めてのことに挑戦する不安が小さくなってきた。

事例3 C児（男児）

＜事前の観察と担任所見より＞

運動遊びをすることはなく、傍観的行動が多い。運動スキルチェックの際は「怖いな」と言って途中で止めることが多い。しかし、集中力も根気強さもあり、何にでも一生懸命取り組む。友達と遊びを楽しむことはなく、活発さにかける。

＜運動遊び教室での様子＞

1回目、はじめのうち傍観的行動をとり、うろろろしていたが、指導者の誘いから、跳び箱、長縄跳びへ挑戦、すぐにできるようになった。2回目からは長縄跳びは「もう1回跳びたい」とか、「20回跳

ぶ」と意欲的で、満足するまで跳び続けた。跳び箱や雲梯でも積極的に遊び、「一人でできた」ととても喜ぶ。その後、いろいろな高さの跳び箱が跳べ、鉄棒では「怖い」様子を見せながらも、25分以上も遊び続けた。高さへの恐怖もなくなり、挑戦することがほとんどできるようになった。指導者や母親に認めてもらおうと「見てー」と主張する。最後には「いっぱいできるようになった。」ととてもうれしそうに言っていた。

＜事後の観察と担任の所見より＞

事前観察のような傍観的行動がなく、活発な友達と長縄跳びをしたり、運動遊びに積極的に取り組むようになった。気の合う友達ができ、同じ遊びを楽しむ中で友達との関わりも多くなり、活発さを発揮できるようになった。運動遊びの楽しさや、やればできるという自信から継続的に遊ぶようになった。

事例4 D児（女児）

＜事前の観察と担任所見より＞

友達と遊ぶことがなく、一人で固定遊具で少し遊ぶ。時折、傍観的行動が見られる。運動スキルチェック時は他の子が先に課題ができると「やりたくない」といって、挑戦しない。また、友達を上手く誘えないため、教師の側にいることが多い。何でも器用にできるのだが、自信がなく、不安を涙が訴えることが多い。静かな遊びを好む。

＜運動遊び教室での様子＞

長縄跳びですぐ20回跳べ、早くできたことで自信がついたのか、いろいろなことに挑戦し始めた。初めは得意なこと意外には、意欲を示さなかったが、簡単なことがいろいろできるようになると難しいことにも挑戦し、できるようになっていった。母親に「見てー」と認めてもらいたかった。

＜事後の観察と担任の所見より＞

自分に自信が持てるようになったようで、教師の側にいることもなくなり、多くの友達と活発に遊ぶようになった。外遊びや運動遊びを好み、根気強く頑張るようになった。

以上、対象児の結果より、運動遊び教室では1時間半の間、運動遊びを積極的に楽しみ、運動嫌いな様子は、全く見られない。さらに毎回、短時間で様々なスキルを獲得したことが有能感の形成につながったようであった。事後は遊びや友達との関わりも明らかに変化しているようであった。これらの結果は意図的に運動遊びができるように教師は働きかける必要があることを示唆するものであろう。